

「難聴児の指導」

東京学芸大学 澤 隆史 先生



東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会

難聴児全体の中で、通常学級に通う子どもの数は7〜8割を占め、毎年少しずつ増え続けています。テクノロジーの発展によって、補聴器や人工内耳などの性能もこの20年ほどの間に大きく向上し、ことばを聴き取る力を伸ばしている子どもも多いです。

今の難聴の子どもは、新しい検査法（新生児聴覚スクリーニング）で障害が発見される例が多く、早い場合だと生後5〜6ヶ月から補聴器を付けて音の聴き取りを開始します。1歳を過ぎると人工内耳を装着する子どももあり、物心がつく前から「聞こえる」生活を送るようにになります。

このことは、「聞こえない・聞こえにくい」という自分の状態を認識する機会が少ない、ということも意味します。難聴でありながら、自分の聞こえにくさを十分に理解しないまま小学校に入学してくる子どもも少なからずいるということになります。

一般に、会話場面での声の大きさを騒音計で測定すると、50〜70デシベルの数値を示します。例えば、電車のガード下では90デシベルくらい、教室内に響く音（子どもが話す声、椅子を動かす音、ノートを開く音など）はおおよそ70〜80デシベルです。それに対し、授業場面で先生が話す声の大きさは80

デシベル程度、怒鳴り声でも90デシベル程度です。これらの数値を比較すると、難聴の子どもが教室の中で先生の声を聴き取ることは、とてもエネルギーを使うことであることが分かります。

現在では、先生の声を明瞭に聴き取るための専用機器も普及しつつあり、これらの道具を使うことは難聴の子どもへの聴き取りに大きな効果をもたらします。しかし、機器を用いても授業や休み時間の中で聴き取れない音はたくさんあり、想像以上に情報が不足しているというのが実状です。学習の中で登場する難しい語句の読み方、学習活動についての細かな注意、子ども同士のおしゃべり、校内放送など、様々な情報が抜け落ちてしまうことがあります。またそのような情報の漏れに対して「気がつかない」あるいは「気にならない」という子どもも存在します。

障害の早期発見や機器の発達など、近年、難聴の子どもが成長するための支援は少しずつ充実してきています。その一方で、自分の聞こえにくさに気づきにくい子ども、情報の漏れが気にならない子

どもも増えてきている印象です。難聴児の指導にあたっては「常に伝える・伝わることを意識し（意識させ）、そのための手立てを尽くす」ことが大切です。常に「意識するのはとても難しいことですが、伝えることへの注意や工夫の一つひとつが、子どもの成長の一步一步につながります。先生と子どものお互いが伝える工夫を考え、伝わる楽しさを味わいながら学習できる教室を作っていきたいですね。

◇在籍学級の先生方へ◇

きこえに困難を抱える児童は機器を用いていても、聴き取ることができない音がたくさんあります。また情報が不足している状況に児童本人が気付かない・気にならないこともあります。どのような場面で困りやすいか、きこえの教室の担当者と連携をしていたきたいと思います。

（文責…奥田和也）



◇ 学級紹介 ◇

葛飾区立本田小学校 ことばの教室

本校は京成押上線の京成立石駅から、徒歩5分のところにあります。葛飾区のことばの教室は、昭和45年に葛飾区立新宿小学校に開設され、昭和50年に葛飾区立本田小学校に移転しました。当教室では、担任3名で構音指導、吃音指導を中心に行っています。

構音指導は、1対1の個別で行い、子ども一人一人に合わせた指導を心がけ、誤り音が発音できるようになる喜びを感じられるようにしています。

吃音指導では、学校で困っていることや悩んでいることを話し合い、心の安定を図っています。また、月に1回吃音グループ活動を行い、吃音の勉強をしたり、子どもたちが企画した遊びをしたりしています。

今年度から「ことばの教室 お楽しみ会」をするなど、様々なアイデアを出し合いながら楽しいことばの教室にしようと日々試行錯誤しています。
（文責 倉田 拡）



（難言学級の教室）

◆ブロック研究発表会のお知らせ◆

江北ブロック

・テーマ 「子供の捉え方、関わり方
〜やりとりに課題のある
子供の指導〜」

・講師 東京学芸大学

教授 藤野 博 先生

・日時 平成30年1月30日（火）

午後二時から四時半

・会場 石神井公園区民交流センター

三階 大会議室

江南ブロック

・テーマ 「非流暢性のある児童を
見立てる視点を広げる」

・講師 筑波大学

准教授 宮本 昌子 先生

・日時 平成30年2月13日（火）

午後二時半から四時半

・会場 渋谷区立神南小学校
体育館

※参加される先生方へ

各会場に名札・上履き・靴を入れる袋をお持ちください。

事務局より

事務局は、今年度、三連協（都情研、都弱視研、都難言協）や都教委との意見交換会、関難言協、ろう学校との合同研究会などの窓口として、他団体との連携を推進してきました。

都難言協は各区市の分担金や東京都教職員研修センターの研究奨励費と、会員の方々の協力に支えられています。来年度も都難言協がより実りの多い研究活動を進め、成果を出していけるよう、今後共ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

―編集後記―

ご多用中の折、原稿をお寄せ頂いた皆様に熱く御礼申し上げます。本会報を日頃の教育活動に役立てていただければと思います。

都難言協会報

代表者（会長）森 真二

責任者（広報委員長）土田 昇

発行日 平成二十九年十二月一日

発行数 六〇〇〇部

印刷 有限会社 正陽印刷



ことばの発達 ……就学までに、こんな道のりをたどっています……

ここでは、小学校就学前の一般的なことばの発達について紹介します。在籍校の先生方には、言語発達の課題、吃音、構音障害で通級している子どもたちや、通級はしていないけれど「ことばが少し心配かな？」と思う子どもたちへの、理解を深めることにお役立ていただければと思います。わかりづらい用語につきましては、近隣の難言学級の教員まで、気軽におたずねくださいね。

	0 歳	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳
言語発達	«クーイング» 「クークー」 「アー」 «喃 語» 「マママ…」 	«初語» 意味のある ことば 「ママ」 「パパ」 「ブーブ」 語 彙	物の名前を たくさん質 問する。 <u>二語</u> <u>文</u> を使い始 める子もい る。 50語を超えると、 一気に増え始める。	<u>幼児語</u> が多い（「ネン ネ」）。2歳半頃から単語 を羅列、さらに長く複雑 な文を使うことが増え る。「どうして？」を連 発する。 300語程度	話しことばは概ね成熟し、 <u>他者との伝え合い</u> も 可能になる。幼児語から <u>成人語</u> に移行（「寝る」）。 語彙の種類が増え、 <u>助詞や時制</u> などの文法也使 えるようになる。少しずつ、 <u>ことばによる行動</u> <u>調整</u> ができるようになる。 1000語程度	自己中心的なおしゃべりから、 <u>相手や状況に合わ</u> <u>せた会話</u> が可能な段階に移る。修飾語の使用や、 複文のはめこみなどもできるようになる。 <u>ことば</u> <u>を使って考える</u> ことも増える。 <u>ことばを社会適応</u> <u>の手段として活用</u> できる段階になる。 1500語程度 2000～2500語程度	
吃音	ことばを繰り返したり、引き伸ば したり、つもらせたりすること	«初語»から吃音が出始め ることは、ほとんどない。	吃音の出始めは、 <u>多語文（二語文以上）</u> で話すことができるようになる2歳～5歳が最も多い。 幼児期に吃音が出始めた子の7～8割程度は、吃音が自然に消失すると考えられている。				
構音	«喃 語» <u>母音</u> 「アウー」 <u>両唇音</u> [p, b, m] 「ププー」 「バプー」 「マママ」 <u>歯茎音</u> [t, d] 「ダダダ」	«初語» <u>両唇音</u> が主。 「ママ」 「パパ」 「ブーブ」	<u>歯茎音</u> が 増える。 <u>奥舌の破裂音</u> [k, g] <u>破擦音</u> [tʃ] も出始める。 1歳 ← → 3歳頃に完成 あ行 か行 たちてと な行 ま行 ん が行 だ行 ば行 ば行 ※同じ年代の中は、50音順に並べてあります。発音が完成する順番ではありません。	4歳頃に完成 は行 や行 わ	5歳～6歳後半頃に完成 さ行 つ ら行 ざ行 1年生の中に、 <u>さ行、つ、ら行、ざ行</u> が まだうまく発音できない子もいる。	※表中の「 」の発声・発語は、一例です。	

＜参考文献＞ 『PVT-R 絵画語い発達検査 手引き』 上野一彦・名越斉子・小貫悟 著（日本文化科学社）

シリーズ きこえとことばの発達と支援『特別支援教育における 吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援』 小林宏明・川合紀宗 編著（学苑社）

シリーズ きこえとことばの発達と支援『特別支援教育における 構音障害のある子どもの理解と支援』 加藤正子・竹下圭子・大伴潔 編著（学苑社）

（文責：小俣美佳子）